# 県内助産師のネットワーク作りとキャリアアップをはかる取り組み
## －平成 25・26 年度研修会の成果と今後の課題－

キーワーズ：助産師　ネットワーク　キャリアアップ

橋口奈穂美[1)2)]　菅沼ひろ子[1)2)]　田中優子[2)3)]　水畑喜代子[2)4)]　森伴子[2)5)]

1）宮崎県立看護大学　2）一般社団法人宮崎県助産師会

3）古賀総合病院　4）宮崎大学医学部看護学科　5）日高母乳育児コンサルタント

## Ⅰ．はじめに

助産師は、妊娠、出産、産後、子育てと母子およびその家族を含めた対象への継続した健康支援や女性自ら健康管理が行えるよう日常生活を支援するという役割を担っている。これらの役割は昔からの産婆・助産師の自律した仕事として営まれてきた。しかし、出産が家庭から施設に移行してから、助産師は出産を介助する人以外にどういう仕事をしているのかということが見えにくくなり、平成 4 年のお産を経験した人達への調査によると助産師の「仕事内容を知っている」と答えた人はわずか 29.6%にとどまっている[1)]。また、保健婦助産婦看護婦法の制定以降、保助看一本化の検討が行われており、さらに「助産婦の免許は特別な免許なのか母子看護のクリニカル・ナース・スペシャリストあるいはナース・プラクティショナーという資格認定なのか議論が必要である」[2)]との見解もあり、母子保健の専門職者としての助産師のありようが問われてきた。そのような中にあって、宮崎県立看護大学では平成 10 年に、助産師本来の仕事を問い、見直し、県内助産師活動の連携や相互浸透を図りながら、伝統的な助産の技を学び、それを科学的に解明すること、さらには海外での助産師活動にも目を向けながら将来に向けて助産活動を活性化することを目的に、「助産師の仕事研究会」（以下、本研究会）を立ち上げ、乳房ケアや分娩介助等助産の技の修得に向けた研修会や、最新の産科学・新生児学・薬理学等の研修会を行ない、県内助産師のキャリアアップの一助を担ってきた。

しかし、急速な少子超高齢化、核家族化や家族形態の多様化、女性の社会進出、生殖補助医療や出生前診断等医療技術の進歩など、助産師をとりまく環境は変化し続けている。さらに県内においても産科医療施設の減少や施設の偏在があり、施設間連携が重要課題となっている。これらを受け、本研究会は平成 23 年度から県助産師会と協働して県内助産師のキャリアアップと助産師同志が繋がりあうことを目的とした研修会開催に引き続き取り組んでいくこととした。

今回、平成 25 年度 26 年度 2 年間で行われた研修会での自記式質問調査から、研修会の成果と今後の課題を明らかにしたので報告する。

## Ⅱ．研修会の企画運営について

### 1．研修会プログラムの決定及び構成

県内の助産師活動の連携や相互の浸透を図る助産師のネットワーク作りと、助産師活動をさらに活性化することを目的として、様々な勤務形態にある助産師の関心事と子育て支

援の観点から必要と思われる内容を検討し、講演及びグループワークでプログラムを構成する。グループは、施設勤務助産師と地域活動助産師の混合及び様々な年代の構成とする。

2．発送先及び数

宮崎県助産師会会員約120名と県内産婦人科及び母子に関連する機関約40か所に発送。

3．企画運営者の構成

病院勤務助産師1名、開業助産師1名、教育機関勤務助産師2名

Ⅲ．研究方法

1．対象と方法：研修会の参加者に、終了後、自記式質問調査を依頼する。質問内容は、年齢、勤務先及び研修会内容が今後の活動に参考になったかの意見や感想（自由記述）の3項目である。

2．分析方法

1)年齢、勤務先は、記述統計として分析する。

2)自由記述欄に記述されている表現から、研修目的に照らして成果と思われる内容を抽出し、類似性・相違性を比較検討しながら整理する。

3．倫理的配慮

自記式質問調査紙に倫理的配慮を明記し、不利益が生じないよう、研修会終了後に依頼する。調査は、研修会の評価を目的としていること、無記名自記式の個人・施設が特定されないよう配慮していくこと、集計結果を学会等で公表する旨を口頭と文章を用いて説明し、提出をもって同意とみなした。

Ⅳ．結果

1．研修会の内容

【平成25年度のテーマ】

1)第1回：周産期における医療安全について(参加人数26名)

2)第2回：妊娠分娩産褥ケアの向上にむけた事例検討会(参加人数32名)

3)第3回：妊婦のマイナートラブルや乳房トラブル時の対応について(参加人数73名)

4)第4回：子ども虐待防止について～事例を用いた検討～(参加人数47名)

5)第5回：分娩台でできるアクティブバース(参加人数39名)

6)第6回：母乳育児を目指して(参加人数47名)

【平成26年度のテーマ】

1)第1回：予期しない妊娠をした女性への支援について(参加人数45名)

2)第2回：周産期における医療安全について(参加人数35名)

3)第3回：妊娠中の骨盤ケア・赤ちゃん体操について(参加人数67名)
～東洋医学的な見地から安全・快適育児へのアプローチ～

4)第4回：助産の実践から生まれた疑問と研究への取り組み(参加人数23名)

2. アンケート結果

＜平成 25 年度＞

1)研修会参加人数とアンケート回収率

各研修会への参加人数には差があり、最少 26 名最多 73 名であった。アンケート回収率は 81～100%であった。

2)参加者の年齢構成と勤務先

各研修会での参加者の年齢構成、勤務先を図 1・2 に示した。参加者の年齢は、第 1 回から第 6 回の研修会を通して、毎回 30 歳代の参加が最も多かった。全体を通して 30 歳代 40 歳代 50 歳代 20 歳代の順の割合であった。

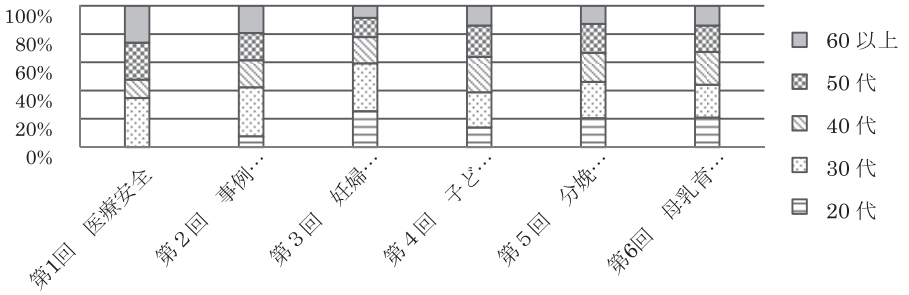


図 1　年齢構成

研修会参加者の勤務先については、病院、診療所、助産所及び地域活動、教育機関、その他で集計を行なった。第 1 回から第 6 回を通して病院勤務者の参加が最も多く、次いで助産所及び地域活動であった。

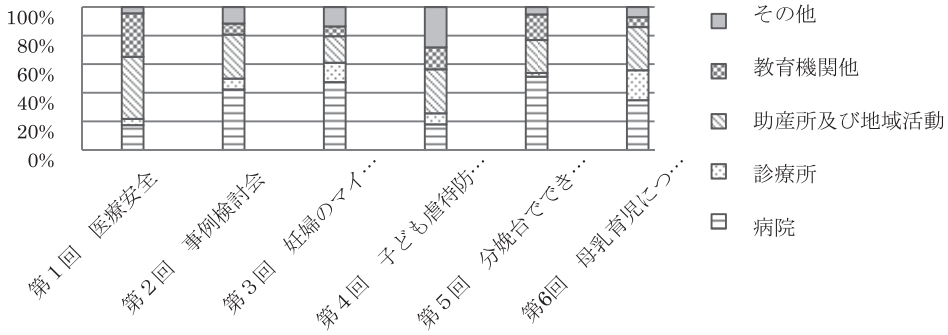


図 2　勤務先

3)自由記述欄に記述されている内容

研修目的に照らして、意見や感想を自由記述できる欄に記述している内容を精読し、研修会の成果と思われる部分は 138 件抽出された。抽出された 138 件を類似性・相違性の視点で比較検討し 5 項目に整理した。「」は記述内容、【】は成果として示す。その結果、「日頃の自分の行動・コミュニケーションの取り方を考え直す良い機会」「衣食住をととのえることを意識して関わってきたかと考えさせられた」など【実践を振り返る】と、「一人では見抜けなかったことなど、たくさん知識として持ち帰ることができた」など【知識の深まり】が確認された。また「母子のために何とかしたいとモチベーションが高まった」や「早々に活かしたい」など【実践意欲の高まり】や「具体的に実体験

でき明日に繋がりそう」「ケアの方法の具体例が学べた」など【具体的方法を得る】、「横の繋がりを持つ機会となった」など【相互交流】が認められた(表 1 参照)。

表 1　平成 25 年度研修会参加者の意見・感想

| 研修目的に照らして成果と思われる内容を抽出したもの（一部抜粋） | 成果 |
|---|---|
| 困るのは患者さんであることを改めて考え関わろうと思った<br>衣食住をととのえることを意識して関わってきたかと考えさせられた<br>日頃の自分の行動・コミュニケーションの取り方を考え直す良い機会となった<br>自分自身のエラー誘発傾向がわかり、防止対策を考えるきっかけができた | 実践を振り返る |
| 一人では見抜けなかったことなど、たくさん知識として持ち帰ることができた<br>灸・マッサージと興味はあったが東洋医学の歴史や決まりごとを知った上で学ぶと学びが深まった<br>側臥位など分娩介助の仕方を直接見て経験できてよかった<br>「家庭訪問」チャンスのある私たちが生育暦など語ってもらうことの大切さやその際の視点を学んだ | 知識の深まり |
| 母児のために何とかしたいとモチベーションが高まった<br>導入は難しいが今ある環境を最大限に活かしながら頑張っていきたい<br>少しでも役立てられるように頑張りたい | 実践意欲の高まり |
| 助産師は指導よりも、対象者に語らせることが大事とわかった<br>具体的に実体験でき明日に繋がりそう<br>アクティブバースについて学ぶ機会になり、フリースタイルそれぞれの筋肉の使い方を解剖学的に考えられた | 具体的方法を得る |
| 話がきけ、もっと県内の情報を知りたいと思った。連携しないと、と思う<br>横のつながりを持つ機会となった<br>各施設の努力がみえどのようなフォローが必要か見えてきた | 相互交流 |

＜平成 26 年度＞

1)研修会参加人数とアンケート回収率

各研修会への参加人数23名から67名で、アンケート回収率は91～100%であった。

2)参加者の年齢構成と勤務先

各研修会参加者の年齢構成、勤務先を図 3・4 に示した。第 1 回から第 4 回の研修会を通して、30 歳代 40 歳代の参加が多く、第 3 回の灸やマッサージ・ツボという技術演習へは 20 歳代が約 5 割を占めていた。

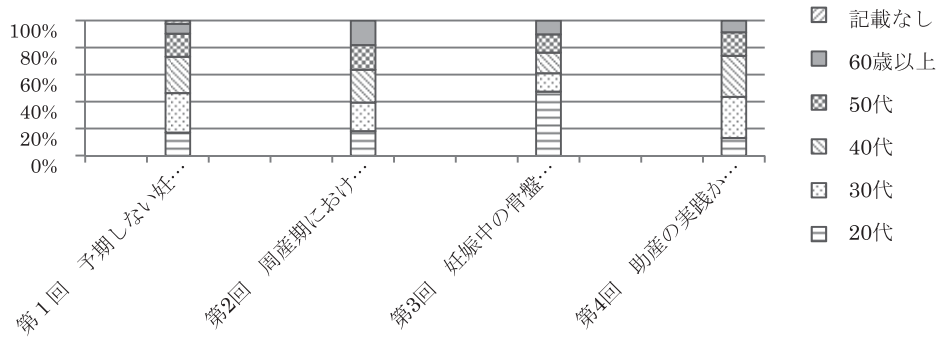


図 3　年齢構成

研修会参加者の勤務先については、病院、診療所、助産所及び地域活動、教育機関、その他で集計を行なった。第１回から第４回を通して病院勤務者の参加が最も多く、次いで助産所及び地域活動であった。

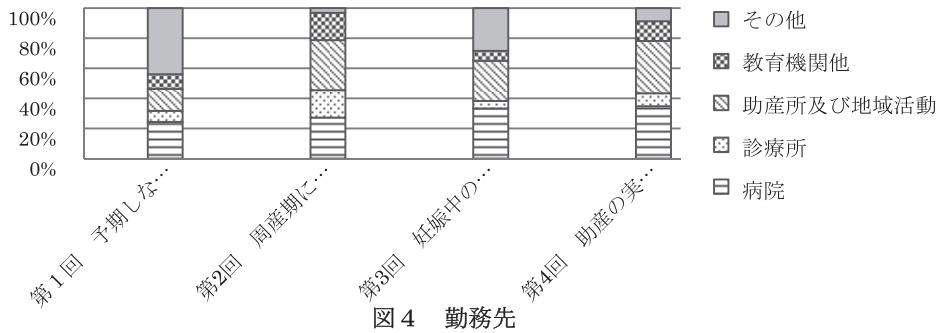


図４　勤務先

3)自由記述欄に記述されている内容

自由記述欄から研修会の成果と思われる部分は108件抽出された。類似性・相違性の視点で比較検討し６項目に整理した。その結果、「短い時間にどう声をかけるか、対応できているか困ることがあったため勉強になった」と【実践を振り返る】や、「具体的な相談対応方法について学ぶことができた」など【具体的方法を得る】、「現場で早速指導として活動できる」「わかり易くすぐに実践に活かせる内容であった」など【実践意欲の高まり】、「根拠をもって実践できる力をつけるために自己研鑽を忘れてはいけないと思った」と【継続学習の動機づけ】、「他の施設の仕組みや情報などを聞くことができ情報交換の場となった。」など【相互交流】が認められた。一部表２に示す。

表２　平成26年度研修会参加者の意見・感想

| 研修目的に照らして成果と思われる内容を抽出したもの（一部抜粋） | 成果 |
|---|---|
| 短い時間にどう声をかけるか、対応できているか困ることがあったため勉強になった<br>自分が陥りがちな対応パターンについて改めて確認できた<br>妊娠期から関わっていたがもっと骨盤ケアなど妊婦さんに教えたいと思った | 実践を振り返る |
| 明日から即実践できる内容で良かった<br>現場で早速指導として活動できる<br>わかりやすくすぐに実践に活かせる内容であった | 実践意欲の高まり |
| 興味はあったけどじっくり学ぶ機会がなかったが、とてもわかり易く知ることができた<br>とても良い学びがあり今回も目からうろこみたいにたくさんの知識が増えた | 知識の深まり |
| 具体的な相談対応方法について学ぶことができ<br>コミュニケーションをとる際に適切な事不適切な事がわかった<br>体の触り方、体の見方など指先でみるということを詳しく聞け楽しく学ぶことができた | 具体的方法を得る |
| 根拠をもって実践できる力をつけるために自己研鑽を忘れてはいけないと思った<br>新しく改訂したものもあり、定期的に研修会に参加する必要性を感じた | 継続学習の動機づけ |
| 他の施設の仕組みや情報などを聞くことができ情報交換の場となった。<br>助産師仲間の実践の問いがたくさん聞けて良かったそれをもとに自分の問いや動機を改めて考えられた | 相互交流 |

Ⅴ．考察

1．参加者の属性から見た研修会の課題

県内助産師の就業人数は290人(平成24年末現在)[3]であり、年齢構成は30歳代が32%、次いで20歳代22%、40歳代21%となっている。今回2年間の研修会参加者の年齢構成をみると、30歳代の参加率が25%と一番高く次いで20歳代の23%、40歳代の21%となっている。研修会参加者には助産師以外も含まれているが、概ね県内助産師の年齢別就業状況と一致していた。しかし、県内助産師61%の179人[4]は病院就業となっているが、研修会に占める病院勤務助産師は34%である。逆に助産所勤務の助産師は、県内において9%であるが研修会に占める割合は27%と参加率が高い。「『健やか親子21(第2次)』の基盤課題Ａ切れ目ない妊産婦・乳幼児への保健対策」[5]として、連携体制の強化が謳われているように、多くは病院診療所で出産する母親を病院診療所勤務の助産師と地域で活動する助産師が繋がることで、母子への切れ目ない支援体制づくりに結び付く。平成22年の保健師助産師看護師法の改正に伴い卒後研修が努力義務となり、病院診療所においては自施設内での研修機会や看護協会での研修受講も多いと考えられ、研修会テーマの中でも医療安全に対する病院診療所勤務の助産師の参加が助産所及び地域活動助産師より低いのは、医療安全推進総合対策[6]として自施設での研修を受講しているためと考える。県内助産師の年齢構成と勤務先を考えると、研修会テーマによっては、参加人数にバラつきが見られるのは当然と思われるが、今後は、他機関の研修計画を把握しつつ、助産所及び地域活動の助産師と病院診療所勤務の助産師双方の参加動機が高まる研修内容の精選と広報のあり方が課題である。

2．研修会の成果について

研修会アンケートの自由記述内容を分析して得られた成果には、「一人では見抜けなかったことなど、たくさん知識として持ち帰ることができた」など【知識の深まり】や、「アクティブバースについて学ぶ機会になり、フリースタイルそれぞれの筋肉の使い方（ゆるめかた）を解剖学的に考えられた」など【具体的方法を得る】ことが含まれており、参加者は、体の構造を知ったうえでの助産の手段を得ていた。また、「導入は難しいが今ある環境を最大限に活かしながら頑張ってきたい」と【実践意欲の高まり】がみられた。2年間10回の研修会は、毎回テーマが異なり、子ども虐待や乳腺炎・予期せぬ妊娠など事例検討を行なう事で改めて「助産師とは」を考える内容や、アクティブバース等知識の獲得と技の修得に向けた内容を組んでいる。キャリアアップとは、より高い専門的知識や能力を身につけることにあり、研修会は専門知識の蓄積や実践の手段を得、意欲の高まりに繋がっており、実践に役立っていると言えよう。

しかし、看護は個別な対象への個別な関わりで、看護実践は常に一回性のもの[7]である。可能な限り事前に予測をしていたとしても、対象の思わぬ行動や反応により、当初の予定通りに展開しないことも少なくない。技術的合理性の観点に立った看護マニュアルにとらわれてしまうのではなく、看護師は、患者一人ひとりの態度や反応に注意深く耳を傾け、患者と省察的な対話をしながら対応し、みずからの専門性の内実を省察しつつ豊かにしていく必要がある[8]。ここに、看護職者としての実践能力の向上には、【知識の深まり】に【具

体的方法を得る】ことだけでなく、【実践の振り返り】が行われることが必要不可欠と言える。今回の自由記述には、「自分が陥りがちな対応パターンについて改めて確認できた」など、自身の行動特性に気づいた実践の振り返りや、「妊娠期から関わっていたがもっと骨盤ケアなど妊婦さんに教えたいと思った」と対象を思い浮かべながら自身の実践を振り返っている内容がみられた。質問調査紙での問いかけが、「研修会内容が今後の活動に参考になったかの意見や感想をお聞かせください」であったことから、自由記述内容には「関わりを考えさせられた」と記述している者が多く、対象や状況など関わりの場面は想起できなかった。質問調査紙に記述することも、実践の振り返りや研修会で得られたことの意識づけに役立つと考え、今後はアンケートでの問いかけ方の工夫が必要である。更に、平成 26 年度の結果からは、「根拠をもって実践できる力をつけるために自己研鑽を忘れてはいけないと思った」など【継続学習の動機づけ】もみられ、保健師、助産師、看護師及び准看護師は、免許を受けた後も、臨床研修等を受け、その資質の向上を図るよう努めなければならないという看護生涯学習の意識づけに、研修会が役立っていることがうかがえた。

本研修会は、県内助産師のネットワーク作りも目的としており、研修会に参加して「横のつながりを持つ機会となった」や「他の施設の仕組みや情報などを聞くことができ情報交換の場となった」など【相互交流】がはかられていた。ネットワーク作りの目標は、妊産褥婦子育て中の母親や女性へ、助産師が継続して支援できるよう県内助産師達が顔見知りとなって繋がりを作り情報交換できる間柄になっていく事である。現在、宮崎県内の病院の中には、子育てへの継続支援が必要な母子が退院する際に、病院勤務助産師から地域で活動している助産師や行政保健師と母子訪問指導員に紹介状を送りその結果が返信されるという、母子に関わる看護職者間での連携の取り組みが行われている。今後【相互交流】がますます進むよう、引き続き、助産師の年齢・勤務先を考慮して研修会グループを構成し、グループに配置する企画運営者の役割を再確認することも必要である。

## Ⅵ. まとめ

今回の考察により、本取り組みの意義ある成果というものを確認することができた。おりしも日本看護協会においても、助産実践能力習熟段階（クリニカルラダー）活用ガイドが作成され、社会や妊産婦からの役割期待に応えることができる助産師の育成 [8]が進められているさなかである。また助産師独自の仕事である、院内助産・助産師外来などへの取り組みも社会から評価されてきつつあり、特に産後ケアについては社会からの要望も強い。今後も、社会・医療の動きと連動したテーマでの研修会企画運営に臨みそこで得た研究成果や課題を基にして、今後の助産師独自の力の向上とネットワーク作りに寄与していきたいと考えている。

引用文献

1) 阿部真理子(1998)：［特集］助産婦が見えない　『ぐるーぷ・きりん』のアンケート調査から，助産婦，52(2)，6-11
2) 日本助産婦会出版部出版委員会(1998)：特集　保助看法改正問題と看護師案について考える　日本看護協会の考える保助看法改正の動きー看護師案に焦点を当ててー，助産婦，52(1)，6-8
3) 宮崎県(2014.5.6)：Q2.県内看護職の就業場所状況は，http://www.pref.miyazaki.lg.jp/iryoyakumu/kenko/iryo/2-q2.html(参照 2015.1.31)
4) 前掲載 3)
5) 厚生労働省・健やか親子 21 推進協議会(2015.4.1)：「健やか親子 21（第 2 次）」周知用パンフレット　http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000067539.pdf(参照　2015.4.27)
6) 厚生労働省(2002.4.17)：医療安全推進総合対策～医療事故を未然に防止するために～，http://www.mhlw.go.jp/topics/2001/0110/tp1030-1y.html(2015.4.28)
7) 薄井坦子(2004)：科学的看護論，第 3 版，7，日本看護協会出版会
8) 三輪健二(2008)：省察的実践者としての看護師とは，看護教育，49(5)，402-406
9) 福井トシ子(2013)：はじめに『助産実践能力習熟段階（クリニカルラダー）活用ガイド』作成にあたって，井村真澄・高橋弘枝(編)，助産実践能力習熟段階（クリニカルラダー）活用ガイド，2-5，株式会社日本看護協会出版会